特別支援教育研究会

部　　長　髙木　花織
研究主任　加藤　　央
部員数　　５３名

１　研究主題

「一人一人の成長を目指した指導方法や連携の在り方の研究」

２　はじめに

特別支援教育研究会では、特別な支援が必要な児童生徒一人一人の指導・支援、また校種間の連携の在り方について検討してきた。切れ目のない支援・指導により、進学した先でも安心して学校に通うことができ、教員も児童・生徒の成長のための効果的な指導・支援ができると考えたからである。これまでの研究会の活動により、小中学校の連携する機会は多く取られるようになってきた。今年度は小中学校間の連携にとどまらず、園と小学校、中学校と高等学校の連携についても考え、園から高等学校まで切れ目のない指導を目指して研究していくこととした。

３　研究経過

（１）　中学校のブロック別に分かれて各校の実践報告や困っている指導や授業に関する事例検討会を行った。

（２）　講師を招き、特別支援学校における校種間の連携について聞いた。

４　研究の概要

4 月	・組織づくり
５月	・ブロック別実践テーマ決め、年間計画、小中連携について
6 月	・実践報告（小牧西中、応時中、大城小、篠岡小、本庄小）
7 月	・実践報告（小牧原小、北里小、桃ケ丘小、味岡中）
9 月	・講演
10 月	・愛日教研発表
11 月	・実践報告（村中小、米野小、陶小、光ヶ丘小、岩崎中）
12 月	・実践報告（小牧小、小牧南小、桃ケ丘中、味岡小）
1 月	・実践報告（小牧中、小木小、光ヶ丘中、一色小）

（１）　ブロック別実践報告会について

実践報告会では、研究主題をもとに各校が実践したことからレポートを作成し、その授業の工夫や問題点について話し合った。またその月の担当校が困っている事例や知りたいことをテーマとし、それについてブロックで考えた。実践

【事例検討の様子】の写真

報告会には、春日台特別支援学校、一宮東特別支援学校、小牧特別支援学校の先生方に助言者として来ていただき、各校の困りや授業に関して、多くのご助言をいただいた。

（２）　講演会（９月１０日）について

春日台特別支援学校の地域支援部の方々に依頼をし、「切れ目のない支援・指導の在り方について」というテーマで講演していただいた。講演では、個別の教育支援計画など引き継ぐ書類にどんな内容を記載するといいか、誰が関わりどのように連携するといいかなど連携の仕方の話から、普段の指導や支援に関しても将来、学校を卒業した先まで見据えた指導・支援をすることの大切さを改めて伝えてくださった。地域の小中学校の特別支援学級から進学した生徒を受け入れる側からの視点で教えてくださって、気づきがとても多い講演だった。

（３）　愛日研究集会について

「一人一人の成長を目指した指導方法や連携の在り方の研究―小牧市における切れ目ない支援体制の構築―」というテーマで園から小学校のつながり、小学校から中学校へのつながり、中学校から高等学校へのつながりについて発表を行った。

【ブロック別交流会】の写真

小学校から中学校のつながりでは、特別支援学級同士で行われる「ブロック別交流会」「ブロック別校外学習」について発表した。そこでは中学生が中心となって行事を計画し、小中学校の子どもたちが混じり合ったグループで、ゲームや制作活動、水族館の見学などを行っている。中学生にとっては、企画力をつけたり、リーダーシップを発揮したりする場になっている。小学生にとっては、中学生と一緒に行動できるので、将来の自分の姿を描くきっかけになっている。互いを認め合いながら関わる良い機会となっている。

また、通級指導教室による小学校から中学校へのつながりについても紹介した。通級による指導では、子ども一人一人が困りに向き合い成長していくための自立活動を行っている。週１回程度の取り出し指導に止まらず、通級による指導で行う自立活動の内容を、学級や家庭にも広げていくため、日頃から保護者や学級担任と、指導記録ファイルなどで情報交換を行っている。しかし中学校では、小学校よりも子どもに直接関わる教員の数が増えるため、小学校より多くの関係者と情報共有する必要性が増す。そのため、小牧市では、通級指導教室運営打合会が開かれ、通級による指導の担当教員と小中学校の特別支援教育コーディネーターが、通級による指導を受けている児童生徒の様子を共有し、学級での効果的な対応方法や、実効性の高いケース会議

の持ち方などについて検討を行っている。

本研究により、幼稚園・保育園から高等学校まで、切れ目なく支援がつながると、特別な支援を必要としている幼児・児童・生徒の成長を促すことができることを実感することができた。

5　今後の課題

ブロック別実践報告会では、各校の事例検討や実践報告について、小学校・中学校の枠を超えて話し合い、互いの学校での様子を詳しく知る機会にもなっている。困り感を共有しながら特別支援学校の地域支援部の担当教員に対応方法を相談できるので、発達段階に即し、先を見通した支援を考えることができた。今年は実践報告の学校にも実践報告に加えて困り・疑問を提案していただくことをお願いして、特別支援学校の先生方にご助言いただく機会をつくることを意識した。各ブロックともより深い話ができたのではないかと感じる。実践報告もとても参考になるが、今後も実践報告の発表の場だけではなく、日常に即した困りや疑問を話し合うことができる場としたい。